研究全体構想

児童の実態（アンケート調査より）
・学年が上がるに従い「よりよく生きるための方法が分かってきた」の割合が増加している。
・友達の考えを参考に自己を振り返ることに課題が見られる。

学校教育目標
「当たり前のことを当たり前にできる子」
～知・徳・体のバランスの取れた児童の育成～
・健康でたくましい子
・思いやりの心をもち協力する子
◎よく考え進んで学ぶ子

社会的側面
・道徳の教科化全面実施
学校評価より
・「正しい言葉遣いができている」「自己肯定感が高い」に関して、肯定的意見が共に６５～７０%程度である。

＜ 道徳教育の重点目標 ＞　●協働と自律と創造に基づく全人格教育
・特別の教科道徳の授業を基盤として、全教育活動を通して心を育て、人間性・社会性を身に付けさせる。
・挨拶、返事、マナーなどの礼法の指導を徹底し、よりよく生きる術を身に付けさせる。
・人権尊重の精神を理解し、思いやりの心をもって他者と共によりよく生き抜くために協働の精神を育む。
・社会の変化に対応し、その形成者として自己の生き方を考え、主体的な判断の下に行動するための自律の精神を養う。
　また、社会事象や身の回りの事物に主体的に働きかける創造の力を育む。

＜ 目 指 す 児 童 像 ＞

すずかけ
◎よいことと悪いことの区別ができ、正しいと判断したことを進んで行うことができる児童
・身近にいる人に親切にすることができる児童
・みんなの役に立つことを進んでできる児童

低学年
◎よいことと悪いことの区別ができ、行動できる児童
・気持ちの良い挨拶や言葉遣いなど礼儀を身に付け、身近にいる人へあたたかい心を接することができる児童
・約束やきまりを守ることができる児童

中学年
◎自分の考えや意見を相手に伝えるとともに相手のことを分かろうとし、自分と異なる意見も大切にできる児童
・相手のことを思いやり、進んで親切にできる児童
・正しいと判断したことに自信をもって行うことができる児童

高学年
◎自分と異なる意見が立場を尊重し、自分の考えや意見を相手に伝え、互いに認め合うことができる児童
・思いやりの心をもち、相手の立場を考えて進んで親切にできる児童
・みんなの役に立つことを進んで行うことができる児童

＜ 研　究　主　題 ＞
「こんな人になりたい」「こんな生き方をしたい」と ともに考え認め合う
～考え、議論する道徳に向けた授業改善と評価の工夫～

＜ 研　究　仮　説 ＞
学校の教育活動全体を通して行う道徳教育の要となる道徳科の授業において、
発問の工夫や、言語活動（話合いの工夫・書く活動の工夫）の充実を図れば、
自他を大切にしながら主体的に行動し、よりよく生きようとする児童が育つであろう。

＜研究の視点１（授業改善）＞
●道徳的価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を目指して
◎教材を提示する工夫　◎発問の工夫　◎話合いの工夫　◎書く活動の工夫
・動作化、役割演技など表現活動の工夫　・板書を生かす工夫　・説話の工夫
※◎は重点項目

＜研究の視点２（評価）＞
●児童の学習状況を適切に記録する評価を目指して
・授業中、児童の学習状況を即時記録できるタブレット端末用ソフトの開発（e-ポートフォリオ）

＜研究の方法１（授業改善）＞
●次に記載する機会を中心として、日常的な授業改善を図る
・校長による授業参観と事後指導（全員各学期１回以上）
・各分科会による研究授業を実施し、教員全員での検証
・一人１回実践授業を実施、並びにＯＪＴ委員会を中心に授業を見合う機会の確保
・道徳教育推進教師及び研究推進委員長の授業公開、並びに出前授業、ＴＴの実施

＜研究の方法２（評価）＞
●ＴＴで記録を蓄積する
・学級担任の日常的な e-ポートフォリオの記録
・左記のＴＴ実施時にＴ２による詳細な記録の蓄積

＜教育活動全てを通して行う道徳教育＞
・各教科指導　・外国語活動　・総合的な学習の時間　・特別活動（学級活動・児童会活動・クラブ活動・学校行事）

＜本 校 の 特 色 を 生 か し た 取 組＞
・挨拶、返事、マナーなどの礼法の指導　・毎時間の呼吸タイム　・朝の挨拶運動　・道徳授業地区公開講座
・ｈｙｐｅｒＱ－Ｕの活用（自己肯定感の見取り、座席への活用等）

考え、議論する道徳　発問構成

気付く　＜道徳的価値への動機付け＞

・～したこと（できなかったこと）はありますか。
・～とはどのようなことだと考えていますか。
・アンケート結果では、○○という考えがたくさんありました。△△な考えもありました。

深める　＜教材を通して道徳的価値に迫る＞

☆基本発問～☆中心となる発問

（教材の話の流れを確かめながら）
・このときの（登場人物）はどのようなことを思っていたのでしょうか。
・（登場人物）は、なぜこのようなことをしたのでしょうか。

【留意点】
■教材の中だけの話に終わらないようにする。
■「この時（登場人物）は何と言いましたか。」「この後どうなりましたか。」など、教材に書かれている内容の聞き出しに終始しない。

●道徳的価値に迫る発問
☆基本発問…教材の中で登場人物の心情や動機を問う発問
☆中心発問…基本発問の中で最も重要な発問
★道徳的価値を捉える発問
道徳的価値の意味や大切さを自分のこととして捉えさせる発問
○補助発問…基本発問を補助する発問
○切り返しの発問…共感や感動だけで終わらせないための発問
考えの深まりを促す発問

つかむ　＜道徳的価値を理解する＞

児童の反応が主題と関連する道徳的価値に拡散することを予想しておく。全て肯定的に受け止めねらいとする道徳的価値に誘導することのないよう留意する。

★道徳的価値を捉える発問

【教材に登場する人物に関わらせて考える】
・（登場人物）にどのようなことを言ってあげたいですか。
・（登場人物）に手紙を書いてみましょう。
・（登場人物）は、改めてどんなことに気付いていったのでしょう。

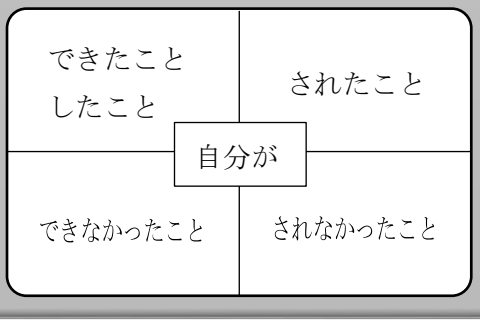
【直接、道徳的価値を考える】
・（道徳的価値）とはどういうことでしょうか。
・なぜ（道徳的価値）は大切なのでしょか。
・このお話は、私たちにどのようなことに気付いてほしいと願っているのでしょうか。

【ねらいの表現から考える】
・（ねらいの表現を受けて）どんな気持ちをもつことが大切なのでしょうか。
・（ねらいの表現を受けて）どのように接していくことが大切なのでしょうか。

見つめる　＜自己を見つめる＞

【自己を振り返る】
・これまで、○○についてどのようでしたか。

【自己を振り返り、生き方を考える】
・自分を振り返ってみて、どんなことを考えますか。
※自己を振り返った後、１人１人が個別に考える。



つなげる　＜意識を高める＞

■道徳的価値を、より身近に感じる。
■道徳的価値のよさを再確認する。

考え、議論する道徳　授業構成

<table>
<tr><th>ｷｰﾜｰﾄﾞ</th><th>時間の目安</th><th>活動の意図</th><th>指導方法の工夫</th></tr>
<tr><td>気付く</td><td>５分</td><td>＜道徳的価値への動機付け＞
■主題に対する興味・関心を高める。
■ねらいとする道徳的価値やそれに関わる事象を、児童が自分事として考える構えを作る。</td><td>＜発問の工夫＞
※展開前段の中心となる発問から派生
・事前のアンケート
・教師との対話　　など</td></tr>
<tr><td>深める

つかむ</td><td>１０分～１５分</td><td>＜道徳的価値に迫る＞
☆基本発問
・中心となる発問で児童に書かせたり考えさせたりすることに焦点化していく。
☆中心となる発問
・児童の反応が関連する道徳的価値に拡散する可能性がありそれらを予想しておく。
・教材の中だけの話に終わらないようにする。
・多くの場合、ワークシートに書かせるのはこの段階となる。

＜道徳的価値を理解する＞
★道徳的価値を捉える発問
・ワークシートに書いたことや教材を通して分かった道徳的価値について、多面的・多角的に考える。

＜道徳的価値を捉える発問の視点＞
◆登場人物に関わらせて考える。
◆直接、道徳的価値を考える。
◆ねらいの表現から考える。</td><td>＜教材を提示する工夫＞
＜発問の工夫＞
＜ワークシートの工夫＞
＜表現活動の工夫＞

●道徳的価値に迫るに迫る発問
☆基　本　発　問…教材の中で登場人物の心情や動機を問う発問
☆中心となる発問…基本発問の中で最も重要な発問
★道徳的価値を捉える発問
…道徳的価値の意味や大切さを自分のこととして捉えさせる発問

目的をもった机間指導を！
◇寄り添う…指導･助言、ほめる
◇つなげる…思考の深まり、コミュニケーション
◇つぶやく…ポイントづくり、刺激
◇生 か す…評価、改善

＜話合いの工夫＞
＜板書を生かす工夫＞

話合い活動（お話玉・波紋型・ＷＣ等）
①中心となる発問の後
②道徳的価値を捉える発問の後　のいずれか。
・主に低学年は①、中・高学年は②となるが教材や発問によっては①と②を合わせて扱うなど、弾力的に設定する。

○補　助　発　問…基本発問を補助する発問
○切り返しの発問…共感や感動だけで終わらせないための発問
考えの深まりを促す発問</td></tr>
<tr><td>見つめる</td><td>１５分～２０分</td><td>＜自己を見つめる＞
■教材から離れて、道徳的価値についてこれまでの自分を振り返る。
■自分の特徴を知る。
■段階的な扱い方も検討しておく。

＜自己を見つめさせる視点＞
○自己を振り返る　⇒　現状認識の強化
○自己を振り返り、生き方を考える　⇒　自分のよさや課題の認識</td><td>＜発問の工夫＞
＜ワークシートの工夫＞
＜板書を生かす工夫＞</td></tr>
<tr><td>つなげる</td><td>５分</td><td>＜思いや考えをまとめる＞
＜自分の生き方を考える＞
■本時間に学んだことを心にとどめ、意識を高める。</td><td>＜説話の工夫＞</td></tr>
</table>

考え、議論する道徳　授業構想

何を学習させるかはっきりさせる

学習指導要領解説
特別の教科　道徳編
○ねらいとする道徳的価値を捉える。

児童の実態
ねらいとする道徳的価値に対して
○これまでの学び
○伸びてきた児童のよさや課題
○上記２点から求められる姿

教材（教科書）
○どのような教材か、教材の特徴を捉える。
○どのような視点で、教材を活用するか。

授　業　の　方　向　性

本時のねらいをつくる

「ねらい」の考え方

○４つの道徳性（道徳的判断力・道徳的心情・道徳的実践意欲・道徳的態度）の中のどれを育てようとしているのか検討する。
「～しようとする心情を育てる」「～しようとする態度を育てる」など
○１単位時間の中で期待する児童の姿をイメージする。

１単位時間の中で期待する児童の姿

道徳的価値を理解している様子 ⇔ **自分との関わりで考えている様子** ⇔ **自己を見つめ直している様子**

指導方法の工夫を考える

教材を提示する工夫
・ＩＣＴ機器の活用
・紙芝居
・ペープサート
○目的
・速やかに道徳的価値に迫る。
・児童が自分事として捉える。

話合いの工夫
・話合いの人数、座席配置、メンバーの入れ替え
・発話者の明確化
・相互指名による話合い
※児童の多面的・多角的な考え方を促す。

発問の工夫
児童の反応を予測して考える
○授業の軸となる発問
・道徳的価値に迫る発問
・道徳的価値を捉える発問
・自己を見つめる発問
※上記３つの発問の関連を明確にして構成する。
※授業前に言葉を確定する。

○考えを深める上で効果的な発問
・補助発問
・切り返しの発問

ﾜｰｸｼｰﾄの工夫
・書くことの焦点化
※児童が自分自身と向き合う時間

表現活動の工夫
・動作化
・役割演技　など

板書を生かす工夫
・児童の思考の流れ
・構造化　・焦点化

説話の工夫
・余韻

考え、議論する道徳　評価

小学校学習指導要領
「第３章　特別の教科　道徳」「第３　指導計画の作成と内容の取扱い」の４
　児童の学習状況や道徳性に係る成長の様子を継続的に把握し、指導に生かすよう努める必要がある。ただし、数値などによる評価は行わないものとする。

　学習における評価とは、児童にとっては、自らの成長を実感し意欲の向上につなげていくものであり、教師にとっては、指導の目標や計画、指導方法の改善・充実に取り組むための資料となるものである。
小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編（第５章　第１節の２　道徳科における評価の意義）
　教師は道徳科においても（中略）それぞれの授業における指導のねらいとの関わりにおいて、児童の学習状況や道徳性に係る成長の様子を様々な方法で捉えて、個々の児童の成長を促すとともに、それによって自らの指導を評価し、改善に努めることが大切である。

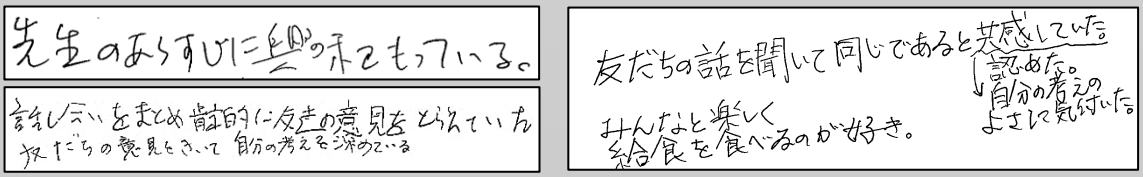
e-ポートフォリオで何を記録し、評価につなげていくか

e-ポートフォリオ内の評価チェック項目

価値理解に関する学習状況	話合い活動中の学習状況	自己の振り返りに関する学習状況
□道徳的価値の理解につながる発言・記述をしている。 □自分事として考えている	□対話を通して、様々な意見があることを認めている。 □友達の考えや気持ちに共感している。	□自分の生活と関連させて具体的に自己の振り返りをしている。 □これからの生き方について考えている。

＋

e-ポートフォリオ内の教師による記述



＋

ワークシートの記述内容（児童）

↓

学習状況の記録の蓄積　　〰〰の部分がワークシートの記述、他がe-ポートフォリオから

・「○○○（教材名）」の学習では、教材のあらすじに興味を持ち、登場人物の気持ちに自分を照らし合わせながら学習した。主人公の強い決意に共感し、「○○・・・・・・・○○」と日頃の生活を振り返った。
・「○○○（教材名）」の学習では、「○○○・・・○○」という友達の話を聞いて共感するとともに、自分の考えのよさに気付いた。その結果、「これからは○○○したい。」と自分の生き方について　記述した。

指導と評価の一体化　小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編（第5章 第3節の2 授業に対する評価の基本的な考え方）
道徳科の学習指導過程や指導方法に関する評価の観点

1　学習指導過程は、道徳の特質を生かし、道徳的価値の理解を基に自己を見つめ、自己の生き方について考えを深められるよう適切に構成されていたか。また、指導の手立てはねらいに即した適切なものとなっていたか。
2　発問は、児童が多面的・多角的に考えることができる問い、道徳的価値を自分のこととして捉えることができる問いなど、指導の意図に基づいて的確になされていたか。
3　児童の発言を傾聴して受け止め、発問に対する児童の発言などの反応を、適切に指導に生かしていたか。
4　自分自身との関わりで、物事を多面的・多角的に考えさせるための、教材や教具の活用は適切であったか。
5　ねらいとする道徳的価値についての理解を深めるための指導方法は、児童の実態や発達の段階にふさわしいものであったか。
6　特に配慮を要する児童に適切に対応していたか。

考え、議論する道徳　話合い活動

	低　学　年	中　学　年	高　学　年
ｷｰﾜｰﾄﾞ	話をつなぐ。	思いや考えをつなぐ。	つないだ考えを広げ深める。
目的	友達の話に関心をもち､その発言を受けて話をつなぐ。	お互いの思いや考えの似ていることや異なることに着目して､相互指名で思いや考えをつなぐ。	自分の考えを発話する機会、友達の話を聞く機会を数多くし、多面的・多角的な考えをもつ。
方法	○お話玉などを使って､話し手と聞き手を視覚化･意識化する。	○お互いの顔が見えるような座席配置で相互指名を行う。	○学習ごと､あるいは学習中に短時間でメンバーを入れ替える。
配置	○コの字型 ○生活班の隊形	○波紋型 ○コの字型	○「ワールドカフェ方式」 ※机１つに少人数で向き合う。
人数	○２人組から生活班（４人～５人程度）で話し合う。	○生活班（４人～５人程度）から学級全体に人数を広げる。	○少人数で話合いを進める店長が残り、２人が移動する。

考え、議論する道徳の話合い活動を支える国語の力（小学校学習指導要領解説国語編から）

話合い活動が授業の目的とならないよう、また多面的・多角的に考え話し合うことができるよう国語科を中心として、下表のとおり、話し合う力を育成することを心掛けた。

	第１学年及び第２学年	第３学年及び第４学年	第５学年及び第６学年
話題の設定、情報の収集、内容の検討	ア　身近なことや経験したことなどから話題を決め、伝え合うために必要な事柄を選ぶこと。	ア　目的を意識して、日常生活の中から話題を決め、集めた材料を比較したり分類したりして、伝え合うために必要な事柄を選ぶこと。	ア　目的や意図に応じて、日常生活の中から話題を決め､集めた材料を分類したり関係づけたりして､伝え合う内容を検討すること。
構成の検討、考えの形成（話すこと）	イ　相手に伝わるように、行動したことや経験したことに基づいて､話す事柄の順序を考えること。	イ　相手に伝わるように、理由や事例などを挙げながら、話の中心が明確になるよう話の構成を考えること。	イ　話の内容が明確になるように、事実と感想、意見とを区別するなど、話の構成を考えること。
表現、共有（話すこと）	ウ　伝えたい事柄や相手に応じて、声の大きさや速さなどを工夫すること。	ウ　話の中心や話す場面を意識して､言葉の抑揚や強弱､間の取り方などを工夫すること。	ウ　資料を活用するなどして、自分の考えが伝わるように表現を工夫すること。
構造と内容の把握、精査・解釈、考えの形成	エ　話し手が知らせたいことや自分が聞きたいことを落とさないように集中して聞き、話の内容を捉えて感想をもつこと。	エ　必要なことを記録したり質問したりしながら聞き、話し手が伝えたいことや自分が聞きたいことの中心を捉え、自分の考えをもつこと。	エ　話し手の目的や自分が聞こうとする意図に応じて、話の内容を捉え、話し手の考えと比較しながら、自分の考えをまとめること。
話合いの進め方の検討、考えの形成、共有（話し合うこと）	オ　互いの話に関心をもち、相手の発言を受けて話をつなぐこと。	オ　目的や進め方を確認し、司会などの役割を果たしながら話し合い、互いの意見の共通点や相違点に着目して、考えをまとめること。	オ　互いの立場や意図を明確にしながら計画的に話し合い、考えを広げたりまとめたりすること。
言語活動例	ア　紹介や説明、報告など伝えたいことを話したり、それらを聞いて声に出して確かめたり感想を述べたりする活動。 イ　尋ねたり応答したりするなどして、少人数で話し合う活動。	ア　説明や報告など調べたことを話したり、それらを聞いたりする活動。 イ　質問するなどして情報を集めたり、それらを発表したりする活動。 ウ　互いの考えを伝えるなどして、グループや学級全体で話し合う活動。	ア　意見や提案など自分の考えを話したり、それらを聞いたりする活動。 イ　インタビューなどをして必要な情報を集めたり、それらを発表したりする活動。 ウ　それぞれの立場から考えを伝えるなどして話し合う活動。

○構造と内容の把握、精査・解釈、考えの形成、共有（聞くこと）

話し手が伝えたいことと自分が聞く必要のあることの両面を意識しながら聞き､感想や考えを形成する。

○話合いの進め方の検討、考えの形成、共有（話し合うこと）

話合いは、話すことと聞くことが交互に行われる言語活動であり、それぞれの児童が話し手でもあり聞き手でもある。話合いの過程では､「話すこと」と「聞くこと」に関する資質・能力が一体となって働くため、指導に当たっては､「話すこと」に関する指導事項と「聞くこと」に関する指導事項との関連を図る。

研究協議会の進め方

研究授業後の研究協議会をワールド・カフェ方式で実施した。次のように行った。

1　４～５人程度のグループでの話合いを基本とする。１回の話合いは５分程度がよい。

2　各グループのホストを１人決め、他のメンバー（ゲスト）が時間経過とともに、他のテーブルに移動し、話合いを進める。その際、ホストが中心となって話題を模造紙に記録していく。ゲストは時間になったら次のテーブルに移動する。

3　ホストは、ゲストが替わるたびに、それまでの話合いの概要を伝えてから、話合いを進める。模造紙を活用すると話がしやすい。

4　ファシリテーター（司会）が時間管理など全体の進行を行う。

5　ホストが協議内容を発表し、全体で共有する。

実践した結果、各テーブルを一回りし、最初のテーブルに戻るところまで行うと、多様な考えに触れたことを実感しやすいことが分かった。

少人数でリラックスして話し合います。

ホストが前グループまでの話をします。

最後に全体で協議の中心話題を共有します。

ワールド・カフェとは

ワールド・カフェとは、カフェのようなリラックスできる雰囲気の中で、メンバーの組合せを変えながら、 4～6 人の小人数で話し合いを続けることにより、深い相互理解や新しい知識を生み出す話合いの手法です。

「男女共同参画推進のためのワールド・カフェ実践手引書（改訂版）」
（２０１７年3月３１日・文部科学省）より引用

Juanita Brown（アニータ・ブラウン）氏と David Isaacs（デイビッド・アイザックス）氏によって、1995 年に開発・提唱されました。

当時二人が、知的資本経営に関するリーダーを自宅に招いた話し合いの場において、ゲストがリラックスしてオープンに生成的な話し合いを行えるように、様々な工夫を凝らした空間で話し合いを行った結果、創造性に富んだダイアローグを行うことができたことが始まりとなります。

その後、想像できないほど多くの知識や洞察が生まれたことに感銘を受けた二人が、その経験から主体性と創造性を高める話し合いのエッセンスを抽出してまとめたのがワールド・カフェです。「知識や知恵は、機能的な会議室の中で生まれるのではなく、人々がオープンに会話を行い、自由にネットワークを築くことのできる『カフェ』のような空間でこそ創発される」という考えに基づいた話し合いの手法です。

「WORLD　CAFE．NET」より引用